

風に助けられて

下妻小友幼稚園

○
三年保育年少（三歳）児に、五月、既成のこいのぼり（印刷されていてそれを切り抜きはり合せる）を作り、口に糸をつけそれを割りばしに結びつけて、園庭を走らせた。手にしっかり握って走る子、手を高くかざして走る子、胸につけて走る子など、持ち方もいろいろだが、走り方も、なりふりかまわずタッタタッタとっつ走る子、後ろを振りかえり振りかえり走る子、お友だちと衝突する子、少し走ってはとまる子とさまざま。そのうちにすべり台にのぼりお踊り場で手をいっぱい伸して少しでも高くこいのぼりをあげようとする子、すべり台の手すりにしぼりつける子、こいのぼりを持ってすべり台をすべる遊びもするようになった。風に向って走るとい

うことがまだ解らない、ただとにかく何処へでも走りまわってさえいれば楽しそうである。
(落合)

○
三歳児。晩秋木の葉もすっかり茶色になって、ほとんど散った頃、落ちないで残っていたけやきの葉が、突然吹いた風に舞いおりた時、その光景を見ていた子どもたちが、「ワー雪だ」と歓声をあげて走りよる。上を向いてキャッキャッとしゃいだり、手を伸ばして舞いおる木の葉を手の中につかみとろうとした。ひとしきり止むとさわめきはおさまって、空を見上げて待っている。また、風が吹いて木の葉が散ると同じように繰り返す。たったそれだけのことだが、その場所だけが木の葉の舞いおるこの光景に魅せられてしまった。
(落合)

○
三年保育年中（四歳）児。一月の風の強い日、「先生、風とばすから紙ちょうだい」とある男の子。「どんな紙がほしいの?」「画用紙でも広告の紙でもいいよ」。そこで私は両方用意してやった。すると、その子は一生懸命、画用紙を四角に切り、セロテープで足をつけた。それから、「糸がないと駄目だ」というので糸をやる。つり糸をつけて早速、顔を輝

かして外に出て行った。しばらくするとしよんぼり戻ってきた。「どうしたの」「ぜんぜんとばねえや」。そこで「じゃ先生、おもしろいたこつくってみようか。みんなもつくれるよ、かんたんだから」といって、ビニール袋を開いてグニャグニャだこを作った。小さくてもすぐあがるので、子どもたちは大喜び。子どものは、作ったもので実際に遊べるところに活動がおきる。

（中川）

二年保育年長（五歳）児。五月の風のある日、数人の子が飛行機を折って外でとばしていた。一人の男の子がその遊びに入ってきて飛行機をとばしはじめようとしたが、人さし指をなめて目の前に立てた。「ほら、こっちから風が吹いてくるんだから、こっちからとばせばいいんだよ」と、みんなに言っではじめた。それを見てある女の子、「えっ、どうして？」ときく。「だってこうすると、こっちの方がつめたいだろ！ だからこっちから吹いているんだよ。こっちからむこうにとばせばよくとぶよ」。そこにいた数人の子もまねしてやってみる。今まで飛行機をとばしていた子は、風の向きと飛行機のとばす方向についてはじめて知ったのである。

それ以後、事あるごとに人さし指を立てて風の方向を知る

うとする子がふえ、たこあげの時には、風をよく考えてとばそうとするようすが子どもたちの中に見られた。（伊佐間）

○

おとうさんといっしょ、たこあげ大会。十二月にヒゴと和紙を配布して、一月十五日の「おとうさんといっしょ、たこあげ大会」の園行事参加と、父親に風つくりを依頼する。それは、余り父親の働く姿を見えない子に、真剣な父親の姿を見せたいということがねらいだけれども、父親とのふれあう唯一の園行事でもある。当日は園児は自分のすきなたこ、父親は自作のたこを持って、たこあげ会場に集合。奴風、角風、連風、三角柱風など各種各様。来るとすぐ、子どもたちが走る。クルリとまわると父親はつりや尾の調整。また子どもが無鉄砲な走り方にうしろから、「あがった、あがった」と声がとぶ。「とまれ、もどってこい」と再調整。広い芝生も百二十名の園児の風で混線。だんだん風に向って走るようになる。こんな活動一時間半、二百メートル三百メートルと糸を繰り出したものが十機以上。終って親の紹介を子どもたちがしどろもどろで紹介したり、風を見せあったりおやつなど楽しい日だった。

（福西）

〔茨城県下妻市〕